2014.1.15 / Vol.44

1880 年代教育史研究会
ニューズレター

第 44 号

目　　次

［連載］
神辺　靖光「学校をめぐる逸話と風景(18)
藩校と明治初期の校舎」…………………… 2

［個人研究］
谷本　宗生「第一高等中学校（1887 年）の
体操担当教員らの顔ぶれについて」………… 3
谷本　宗生「高等中学校生徒らの健康・衛生環境について
――眼病予防・姿勢矯正・体操遊戯――」…… 5
田中　智子「続・再び森有礼へ　――郷里・薩摩（鹿児島県）の
位置を問う――」………………………… 6

［研究紹介］
冨岡　勝　「旧制麻布中学校校友会雑誌を活用した教育と研究
――麻布高等学校水村暁人氏の実践――」…… 7

［研究成果報告書紹介］
小宮山　道夫「科学研究費補助金研究成果報告書の
刊行について」…………………………… 9

［お知らせ］…………………………………… 12

［連載］学校をめぐる逸話と風景（18）

藩校と明治初期の校舎

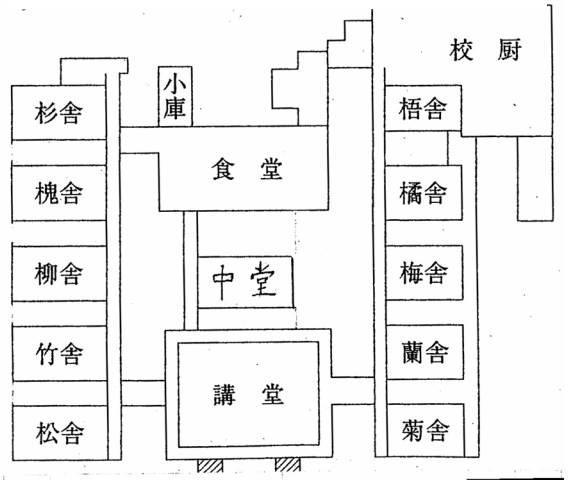
神辺　靖光

前回、明治初期、東京にできた名だたる学校が藩邸を改造してつくったことを書いた。眼を全国に広げると、藩校を使用した学校が目につく。小藩の藩校は小学校に用いられ、大藩の藩校に中学、師範学校が入ることが多い。藩校ではないが、幕府の昌平坂学問所跡に官立東京師範学校→高等師範学校が建てられたのは一つの象徴である。

当時、県庁は県内一の大藩城下町に置かれるのが普通で、県内小学校教員を養成する師範学校は県学務課と密接するので県庁がある城下町に設置された。明治の中学校は師範学校から派生する例が多い。また当時の中学生は圧倒的に城下町に住む士族の子弟が多い。旧藩城下にある藩校が、師範学校、中学校の校舎に利用されるのは必然であった。その典型例として岡山藩学校をあげたいと思う。

岡山藩校は 1641（寛永 18）年にできた花昌教場を起源とする。名古屋、盛岡の藩校に次ぐ最初期のものである。その後 1669 年に校舎を新築した。新建学校と通称している。増築や改築はしているが、この時の基本構造そのままに明治維新、廃藩置県を迎え、藩校校舎は岡山県立師範学校・中学校に引き継がれた。さらに岡山尋常中学校は 1896（明治 29）年、市内新築校舎に移るまで、ここで授業し、師範学校も 1909（明治 42）年、市内新校舎に移るまで、この藩校由来の校舎で教育的営為を行った。その後、遺跡として保存されたが、第二次大戦の空襲で焼失し、今はない。部分改築こそあれ、1669 年建築の藩校校舎が、明治の学校に引き継がれ、校舎として 240 年の命脈を保ったのは稀有な例である。

岡山藩校教室配置図



『日本教育史資料』附録「学校図」の中の旧岡山藩学校之図によってつくる。

岡山藩校の敷地は 7,500 坪、やや北寄中央に校舎があり、その周囲を教職員の住居や生徒寄宿舎、調馬練習所等が囲む。中央講堂を南に進むと藩校を表わす泮池（はんち）があり、正門に至る。上図はこれらを消略し、校舎だけを示したものである。

中央の講堂から北一直線に中堂、食堂と並ぶ。講堂は儒者が己（おのれ）の学説を講釈する所で、120 坪の大広間である。中堂は儒学の祖・孔子を祭る所で、釈奠（せきてん）の礼が行われた。藩校は城中大広間での儒者による講釈と釈奠の祭儀から始まったものだから学校中央にこれが置かれるのは、その起源を表わしているようである。ただ、この聖堂は昌平黌や他の藩校に比べて小じんまりとしている。132 畳の食堂は年少者の手習所を兼ねるものであった。

この校舎の特徴は、講堂・中堂・食堂を挟んで五箇ずつ並ぶ学舎である。西側の舎屋は概ね 36 畳、東側は

概ね 30 畳、いずれも南側に小さな庭があって、その舎屋を表わす花樹が植えてあったと言う。藩校の図面をみると一般に授読所と呼ばれる教室は広くもなく部屋数も少ない。昌平坂学問所も教室に当る聴問所や素読所はやや広い座敷をつなげたものに過ぎない。それは学習の多くが自習（寄宿寮や書生寮）での読書や稽古で、教師との対面授業が少なかったからであろう。それらの教室配置に比べると岡山藩校の教室は 10 もあって、しかも、それらは独立した舎屋であった。

授業は親の身分によって分けられたグループ別に行われたので、ある学舎は士分の子弟の教室として、ある学舎は軽輩の子弟の教室として割り当てられ、さらに習字稽古所、読書稽古所、習礼所というように学科別に使用された。明治になると、この学舎群は有意義に活用されはじめた。即ち、東側五箇の学舎群が師範学校、西側が中学校になり、それぞれ五箇の学舎が等級別、学年別の教室になった。

要するに岡山藩学校の校舎は近世初期に建てられたにもかかわらず、儀礼的な聖堂を小さく、学習活動に有効な大講堂と個々の教室を多くした機能的なものであった。それゆえに、近代学校にスムーズに移行し、近代学校の属性として持つ年限学習、多人数、グループ別学習に適合して明治の末年まで使用され続けたのである。

参考書・城戸久・高橋宏之『藩校遺構』
笠井助治『近世藩校の綜合的研究』
後神俊文『岡山朝日高等学校の生い立ち　戦前篇』

［個人研究］

第一高等中学校（1887 年）の体操担当教員らの顔ぶれについて

谷本　宗生

もっか佐喜本会員や鄭会員らの熱心な調査によって、高等中学校在職教員らの履歴・活動などが少しずつ明らかにされているところである。継続した調査の進展を大いに期待したいと思う。今回は佐喜本・鄭会員らの調査ともかかわるものかもしれないが、第一高等中学校の体操担当教員らの顔ぶれについて、少し本稿で言及してみたいと思う。本稿に至る契機は、『第一高等中学校一覧』(1887 年）の「職員」欄をみていて、“これはちょっと兵式体操以外の体操担当者らの顔ぶれが興味深いのではないか。”と素朴に感じたためである。

『第一高等中学校一覧　自明治十九年至明治二十年』（1887 年 3 月）の「職員」欄によれば、校長は野村彦四郎（石川)、教務商議委員は文科大学教授の外山正一（静岡)、教頭は村岡範為馳（鳥取）が学校執行部である。『同上一覧』の「学科課程」欄で、「体操」学科で「普通体操」を行っているのは、予科第三級(1 期週 3、2 期週 3、3 期週 3 時間）だけで、あとの「体操」学科はすべて「兵式体操」となっている。では『同上一覧』に掲載されている、「体操」「普通体操」（兵式体操は除く）の担当教員らを順次示そう。「教諭」は担当者なし。「外国教師」も担当者なし。もちろん学科目上の担当者ではないが、「英語」を担当するストレンジ（英国）らが生徒らにスポーツ活動を奨励していたことは重要であると思われる（高橋孝蔵『倫敦から来た近代スポーツの伝道師　お雇い外国人 F.W.ストレンジの活躍』2012 年、等参照)。「嘱託教員」にようやく「体操」担当者として、榊原鍵吉（東京）が挙げられている。榊原鍵吉は、直心影流の免許皆伝で最後の剣客として知

られる人物である。幕府遊撃隊頭取となり、上野戦争にも参戦している。明治政府から再三招聘の要請を受けるが固辞し、維新後衰退した剣術の再興と普及に尽力したとされる。榊原の逸話は数多いが、なかでも天皇の面前で兜を斬り割ったこと（兜割り）やお雇い教師ベルツら外国人らとも親交を結んで剣術を指南したことなど興味深いものである。また冷水浴を晩年も実践したとされ、自らを榊原は“冷水翁”と称したという。

「助教諭」には「普通体操」を担当する高等師範学校助教諭の坪井玄道（東京）、中村信量（長野）、東京商業学校助教諭の原収造（福島）の 3 人が挙げられている。中村、原ともに体操伝習所の卒業生で、中村、原は伝習所の教員（体操術）もつとめている。とくに坪井は日本最初の体操教師といわれ、開成所で英語を学び、体操伝習所教員（体操術）をつとめている。お雇い教師リーランド（米国）の通訳となってから、体操・体育学を学んだといわれる人物である。中学校・師範学校教科用書として、坪井玄道・田中盛業編『普通体操法』(1887 年 7 月）がある。『同上書』には、「身体ノ教育ハ、其範囲、極メテ広ク、単ニ体操ノミニ依頼スベキモノニ非ズ、教師タルモノハ、常ニ善ク生徒ノ状勢ヲ視察シテ、平素ノ飲食、衣服、習慣、其他都テ学校衛生ニ関スル諸般ノ事項ニ注意シテ、身体ノ成長、発達、共ニ其宜シキヲ得セシメンコトヲ勉ムベシ」（210 頁）と記されている。田中らが行っていた普通体操は、『同上書』から徒手、亜鈴、球竿、木環などの体操であったことが理解できる。体操の実践が、衛生、生理学などとも密接にかかわるものであったこともうかがえる。注目すべきは、体操を実践するすべての学校では「体格・活力検査」を必ず行っていたということである。毎年 2 回この検査を行って、「統計表」をつくることを掲げている。第一高等中学校でも、当時血気盛んな生徒であった夏目漱石などもその検査の数値をかなり気にしていた様子がうかがえるところである（1889 年 3 月 9 日、同年 9 月 27 日、1890 年 3 月 18 日、身長体重メモ、東北大学附属図書館蔵漱石文庫)。

そして「雇教員」には、「体操」担当する文部省音楽取調掛雇の鳥居忱（栃木)、大野忠育（石川)、「普通体操」担当する東京商業学校雇の吉田五十二郎（長野）が挙げられている。なかでも鳥居は、音楽取調掛にてお雇い教師メーソンを師事した人物といわれる。「鳥居忱先生小伝」鳥居忱述『音楽講義』(尋常師範学科講義録）によれば、音楽改良の研究に没頭しながらも、東京師範学校、学習院、帝国大学、そして「[明治] 十九年第一高等中学校に、公に私に、音楽軍歌の教授をなせり。」と記されている。

第一高等中学校予科第三級の「体操」学科は、翌年（1888 年）には「普通体操　兵式体操」となり、翌翌年（1889 年）にはすべて「兵式体操」となっている。これにともなって、1889 年には「体操」「普通体操」担当教員は第一高等中学校では皆無となり、「兵式体操」担当教員のみとなる。先のニューズレター43 号（2013 年 10 月）で 1888 年の第一高等中学校入試科目の変化を取り上げたが、1888 年の第一高等中学校体操科の入試細目は普通体操と兵式体操であったが、翌 89 年以降の入試（体操科）ではさらに変化があったのであろうか。1889 年ころまでの第一高等中学校の「体操」担当をめぐる動きは、他の高等中学校内でも同じようにあったのであろうか。高等中学校設立時からの教職員の動きなどをみていても、いろいろ興味深いことが想像される。

［個人研究］

高等中学校生徒らの健康・衛生環境について
――眼病予防・姿勢矯正・体操遊戯――

谷 本 宗 生

第一高等中学校に在学しながら、夏目漱石は本所の江東義塾（私塾）の教師として一時つとめている。塾の寄宿舎から第一高等中学校に通っていたが、劣悪な衛生環境からか急性トラホームを患い、江東義塾を辞め実家から第一高等中学校へ通学することになる。漱石はしばしば治療のため、駿河台にある井上眼科病院に通ったといわれる。この漱石にとどまらず、多くの青年子弟らが患った眼病治療に従事した井上眼科（http://www.inouye-eye.or.jp/about/history/course.html）は、1881 年に医師井上達也（1848～1895 年）によって開設された病院である。井上は大学東校でお雇い教師ミュレルらからドイツ医学を学び、東京医学校眼科掛（邦人初の眼科講座主任）をつとめた人物である。1882 年に井上は大学を辞職してから民間で眼病治療に従事しながら、井上式治療法や器具開発など最新の眼科学研究に取り組み、1888 年には本邦初の眼科研究団体・井上眼科研究会を発足させている。井上の著書『井上眼療書巻之一摂生篇』（1878 年）では、「眼病之レ多クハ摂生不良ノ為ニ」生じた障害であるとして、原因療法というべき摂生をまず心がけるように強調する。煙草やお酒も刺激物であるとして、できる限り控えるように助言する。とくに煙草についての注意として、「他人近傍ニ之ヲ嗜用スルモ共ニ坐ヲ同フスヘカラス殊ニ密室ニ於テハ其害最モ甚シ嗜者ニシテ止ヲ得サレハ大気ノ換流宜シキ所ニ於テ風ニ背シテ吹煙スベシ」と挙げている。

1889 年の活力検査の定期的な導入（学生生徒の活力検査に関する訓令）以前は、野村彦四郎が「未タ体育其宜キヲ得サルカ理化学上ニ対シ日問工夫ノ密ナラサルカ」（1887 年 11 月 14 日、第五高等中学校入学式）と指摘したとおり、高等中学校生徒らの健康・衛生環境については一部熱心な学校医・教員がいても、残念ながら十分なものとはいえなかったと思われる。第五高等中学校で不自然な姿勢による近眼や猫背をただすため実施された生徒姿勢標準の試み（1888 年 9 月）について、当時の新聞では森文政が進める自理教育に逆行する干渉教育ではないかとの懸念記事（1888 年 11 月 8 日の読売新聞 1 面）が掲載されている。生徒自身に自理の心を起こさせる森文政の自理教育に対して、生徒姿勢標準の試みは「生徒の衛生等に注意して要する」ものであるが、「慈母の赤子を保護し踊師匠の少妓に足の踏み様手の挙げ様を教ふる」如く「あまり干渉過ぎ」なのではないかと指摘されている。それに対して、体操伝習所を卒業して第一高等中学校や第五高等中学校で体操を担当した前野関一郎は三木熊八との共著『小学体操法』（1893 年）で、「教授スルトキニハ些少ノ誤謬タリトモ決シテ之ヲ軽視スベカラズ若シ之ヲ等閑ニスルトキハ遂ニ体操全体ノ不整不規律ヲ生スルニ至ルベシ故ニ教師ハ特ニ之レニ注意スベシ又矯正術ハ諸運動ノ根本ナレバ一挙動ト雖トモ精密ニ姿勢ヲ正サシメ苟モ不正ノ点ヲ見出ストキハ容捨ナク直チニ之ヲ矯正スベシ且教師ハ各運動ノ目的筋肉ノ使用部及努力ヲ要スル部分等ヲ精密ニ指示スルヲ要ス」と体操担当教員らに注意喚起している。体操自体は、「生徒ヲシテ筋肉ヲ運動セシムルト共ニ勇壮快活ノ気象ヲ喚起セシムル」ものであって、一時的な体操に限らず生徒ら

が自主的に戸外遊戯などを行い、「随意ニ娯楽セシメ専ラ優暢快活ノ気象ヲ涵養セシメン」とはかることがもっとも重要であると述べている。体操・戸外遊戯などはそのための手段方法であり、生徒らにとっての日常生活の内面化（ハビトス）を目標としたのである。

［個人研究］

続・再び森有礼へ ――郷里・薩摩（鹿児島県）の位置を問う――

田中 智子

前号で述べたような経緯で、あらためて「森有礼そのもの」を研究するときがきたと感じる昨今であるが、その一環として、彼にとって郷里・薩摩（鹿児島県）とは何であったのかという問いが脳裏に去来する。

あまり記録を残すことに熱心ではなかった森だから、その行動を逐一把握することは難しいが、イギリスへの密航留学生として慶応元（1865）年に 18 歳で出国して以来、鹿児島滞在が確実な時期を明示しておくことにしよう。

第一の時期は、約３年の留学を終えて明治元（1868）年９月の帰国後に政府に出仕したものの、「廃刀案」建議が否決され、位記を返上して帰郷した明治３（1870）年の２月から９月までの半年余りである。その間、彼は英学塾を主宰していたという。だが、秋には東京に呼び戻されて弁務使を任ぜられ、アメリカに渡った。次に帰国するのは 1873（明治６）年７月のことであり、明六社の活動などを始めた次第だが、特命全権公使として清国在勤となり 1875（明治８）年 12 月に出帆するまでの二年余り、今のところ鹿児島入りは確認できない。1873 年中には父母らが一家をあげて上京しており、郷里との縁が遠くなったことをうかがわせる。

清国特命全権公使在任中、1876（明治９）年に半年ほど賜暇帰朝し、翌年も３ヶ月ほど日本に戻ったが、鹿児島には帰らなかったものと思われる。そして 1878（明治１１）年６月に清での任を解かれて帰着した後、再び特命全権公使としてイギリスに向かうのが翌年 11 月、その一年半ほどの間にもおそらく帰郷していない。４年余りのイギリス滞在中、1884 年４月に帰国するまで、日本の土を踏むことはなかった。

まどろこしい記述となったが、以上をまとめると、18 歳～37 歳の約 19 年間において、おおよそ海外 12 年半（イギリス２年+４年半、アメリカ１年+３年半、中国１年半）、国内６年半（基本的に東京。うち鹿児島半年）という割合となる。このように海外暮らしが長かった森であるが、イギリスからの帰国後 1889 年２月に暗殺されるまで、すなわち文部官僚時代５年弱の間、再び異国に旅立つことはなかった。

一方この間に、森は鹿児島を再訪問している。これが現在判明している限りにおける森有礼「第二の帰郷」であり、1887（明治 20）年１～２月における九州方面学事巡視中のことであった。

この文相としての九州巡回については、知られるところが少ない。同じ巡視でも、東北方面（1887 年６月）、北陸・関西・東海方面（同 10～11 月）、東北方面（再。1888 年 10 月）については、周知のとおり演説記録も残存し利用され、限界もあるとはいえ、それなりに実態が知られている。九州については、主に教育系雑誌に依拠した演説記録がいくつか『森有礼全集』に収録されてはいるが、高等中学校史研究の立場からみたときにかなり重要な、熊本巡視中の演説記録はない。第

五高等中学校熊本設置決定に先立つこの滞在については、『熊本新聞』により従来の知見以上の情報を得ることが可能なので、あらためて紹介する機会があればと思う。同じく、８月に第五高等中学校医学部設置が決定することになる長崎に数日留まっているが（２月 13～16 日）、こちらについても『鎮西日報』などを手がかりとし、できる限り足跡を追ってみたい。

そして森は、海路宮崎・沖縄・長崎に向かう拠点ともなった鹿児島に１月 23～28 日の数日間、逗留したのであった。森にとっては久方ぶりの故郷だったはずだ。だが、このときの彼の行動がわからない。彼はどこに行き、何を見て、何を感じたのだろうか。造士館を訪問したともいわれるが（山下玄洋『中学造士館の研究』私家版、1997 年）それは本当なのか。他の教育機関は訪問したのかしなかったのか。

薩摩国鹿児島城下、藩士森有恕の五男として生まれた有礼は、いうまでもなく薩長藩閥の一人であるが、第五高等中学校を設置するにあたっては熊本を適当の地と考え、鹿児島を設置箇所にする気はさらさらなかったようにもみえる。そのことをどう理解すべきなのかという点にもかかわって、この巡視（二回目の帰郷）についてはぜひとも明らかにしたい。

父の死や再婚も契機となったのだろうが、森が本籍地を鹿児島から東京へと移してしまったのも、1887 年（７月）のことだ。他の藩閥官僚の帰郷頻度やその理由とも引き比べつつ、森と郷里との関係を探り続けるつもりである。

［研究紹介］

旧制麻布中学校校友会雑誌を活用した教育と研究
――麻布高等学校水村暁人氏の実践――

冨岡　勝

尋常中学校と高等中学校（高等学校）の学校生活を考える上で、1890 年前後から 20 年間ほどの間に多くの学校で設けられた全校的課外活動組織の校友会は、寄宿舎とともに、重要であると考えてその成立や変遷について研究を続けている。しかし、そうした研究上の問題意識を日々の授業で活かすことができているか、と言えば決して十分とは言えない状態である。

私立麻布高等学校では、ゼミナール形式の授業で旧制麻布中学校の校友会雑誌を生徒たちが読んでいるということを知って昨年２月の例会で簡単に触れた。その後、その授業を実施されている水村暁人教諭より、論文「中等教育現場における歴史共同研究の実践――校友会誌とオーラル･ヒストリー――」(『日本史攷究』日本史攻究会、第 35 号、2011 年 11 月）をいただいて、その授業の内容を詳細に知ることができた。さらに昨年 11 月と 12 月に麻布高等学校を訪問した際には、実際の授業の雰囲気などについてお話をうかがい、受講生のレジュメも見せていただくことができた。これらの成果をもとに、同校の実践を紹介したい。

麻布高等学校では、2004 年以来、毎週土曜日に１・２年生を対象とした「教養総合」という選択制授業が開講され、水村氏はこの「教養総合」のなかの講座として、2008 年度より「麻布中学校々友会誌を読む」を実施している。

この「麻布中学校々友会誌を読む」の実践意図は、「生徒がゼミ形式の共同研究という学問的経験をする

こと」「史料群を継続的に読み進めることによる学園史研究への貢献」「他校との比較の視点などによる中等教育史研究への寄与」の３点だそうである。

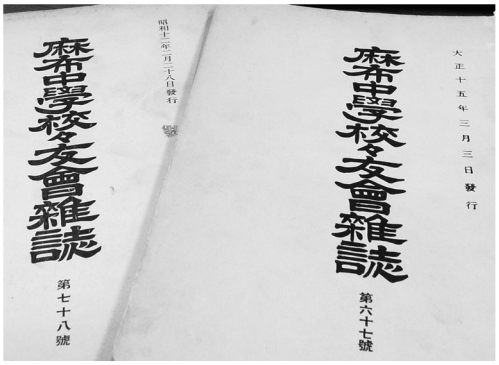
授業は毎年６名前後の受講生が校友会雑誌の第１号より原則として全ての記事を生徒たちが分担して、毎回１人ずつが責任もって報告するという形式で行われるが、全８回（学年前期または後期に 100 分で行われるため）の授業の最初の１回か２回は、レジュメの作成や報告について前年度の受講者がチューター役になってガイダンスを行っている。

報告では、基本データとして①記事タイトル、②記事年代、③筆者、④内容（要約）、⑤キーワード（複数）の５項目は最低限まとめることになっているそうである。将来のデータベース化への布石も打たれているといえるだろう。基本的に全ての記事を報告しているため、約８回の授業１サイクルで、校友会雑誌の１号分というペースだそうだが、この授業が蓄積されれば、麻布中学史研究にとって、大きな財産になると想像される。

報告レジュメを閲覧すると、関連事項として、歴史的背景や登場人物に関する解説、他校の事例などの追加事項が充実したレジュメもあり、熱意を感じた。

旧制麻布中学校の校友会雑誌第 1 号（1899 年 6 月 25 日発行）を見ると、校友会雑誌への教師達からの期待や注意の記事、生徒達からの校友会雑誌についての抱負の記事、生徒による青年論、卒業生からのメッセージ、学術的内容、郷里の父に対する文などと共に、雑報欄には卒業証書授与式、春季大運動会、校友会総則などが掲載されている。第 2 号以降には生徒による詩（口語詩と漢詩や小説なども掲載れている。受講生達は、これらの記事を報告しながら、明治時代の生徒の気持ちを追体験するとともに、従来の研究にはない、新鮮な読み方を重ねていくのかもしれない。

受講生が卒業後どのような学部に進学しているかを水村氏にお聞きしたところ、文系・理系様々なだが中には卒業後に日本史を専攻していた受講生もいるそうである。この授業を経験した研究者が近い将来登場するかもしれない。



『麻布中学校々友会雑誌』の外観

通常は大学生になってから経験するゼミ形式の授業、それも史料講読の授業が現在の高等学校で成立するのか、という疑問が沸いてくるかもしれない。水村氏は「予想外の成果」として、「軌道にさえ乗れば、生徒たちは一定の水準以上で史料を読み込み、レジュメを作り上げ、それを素材に討論を繰り広げながら、互いの論点の矛盾や問題点を指摘しあうまでに議論するようになる」と述べている。これは、麻布高校限定の現象だと言って良いのだろうか。

「本稿で示してきた試みが複数の中等教育現場（特に私立中学・高校）で営まれていくことで、学校史に関する比較史的な研究へと発展させることはできないだろうか」という水村氏の見解に、筆者（冨岡）も同感である。そのうち、久しぶりに出身校である愛知県の私立高校を訪問して、麻布高校の実践を紹介してみようかと思う。

大学での自校史教育でも、大講義室の一斉授業だけ

でなく、史料をじっくり読む講読形式の授業も実施されてよいのではないだろうか。

また水村氏は、1960 年代末の「学園紛争」の経験者であった退職前後の教師にインタビューして書き起こしをするというオーラル・ヒストリーの授業も「教養総合」の一つとして実施している。これも興味深い。

さらに麻布学園の学園史資料室では、「私立中高アーカイブス」を目指して、百年史編纂で収集した史資料をもとに、中学・高等学校ならではのアーカイブスづくりにも取り組んでいる。これについては、大江洋代「「私立中高アーカイブズ」とは何か　―麻布学園学園史史料室所蔵百年史編纂資料を手がかかりに―」（『麻布中学校・高等学校紀要』創刊号、2013 年 3 月）に詳しい。大学アーカイブズでほぼ共通して収集しているような基本的な文書を収蔵しつつ、中学・高等学校の教育の特徴を示す文書や「麻布らしさ」を示す文書も積極的に収集しながら麻布学園アーカイブズを整備していくという構想が示されている。

さらに他の中学・高等学校、とりわけ私立学校でアーカイブズが生れて、相互のネットワークを結びたいという見通しも述べられている。今後の中高アーカイブスのネットワークの進展に期待したい。

麻布学園学園史資料室所蔵史料の一部

なお、旧制麻布中学校の校友会の成り立ちを調べていくと、校友会が発足する前に寄宿舎内で校友会の原型と見なせるような課外活動の組織が作られていることに気がついた。このように寄宿舎が基盤となって校友会がつくられるという経緯は、公立の旧制中学校にはあまり見られない。この麻布中学校の事例を手がかりに、私立中学校の校友会や寄宿舎について更に関心を持つことができた。今後深めて行きたい。

［研究成果報告書紹介］

科学研究費補助金研究成果報告書の刊行について

小宮山　道夫

当研究会が共同研究として取り組んできました平成 22～25 年度科学研究費補助金（基盤研究（B）課題番号 22330220）「1880 年代におけるエリート養成機能形成過程の研究―高等中学校成立史を中心に―」の研究成果報告書が完成しました。

報告書は、「第Ⅰ部　研究の概要」と「第Ⅱ部　研究成果」で構成し、「第Ⅰ部　研究の概要」においては「1 研究組織」、「2　研究経費」、「3　研究会記録」について一覧できるようにまとめました。

「第Ⅱ部　研究成果」が本編となりますが、ここに

はわれわれが研究助成にもとづき期間内に公表した研究成果と、研究助成の申請を着想するに至った研究成果とを盛り込み、読者が通覧できるように構成しました。具体的には当研究会編集の『一八八〇年代教育史研究年報』（以下、『年報』と表記）の第 1 号から第 5 号までに掲載した研究成果について、一部修正のうえすべての原稿を転載しました。これに加え、三木会員による書き下ろしの研究展望「鹿島英語学校に関する一考察―学校設置及び入学希望者と退学者の動向を中心に―」を掲載しました。

『年報』の原稿を掲載するにあたり、原稿の内容に応じて「1　論文編」、「2　史料紹介編」、「3　研究ノート編」、「4　研究展望編」、「5　特別編」の 5 編に分け、それぞれの初出年代順に執筆者別に配列しました。これにより、各会員の研究の展開過程や各高等中学校区域の研究状況を読み取ることが容易となっています。また既知の誤植はすべて改め、一部の原稿については読みやすさを高めるために部分的に書き改めました。

第Ⅱ部の目次は後掲のとおりです。「1　論文編」には 5 人の執筆者による 12 本の論文、「2　史料紹介編」には 4 人の執筆者による 7 編の史料紹介、「3　研究ノート編」には『年報』において「研究」および「研究ノート」と分類した 2 人の執筆者による 7 編の論考、「4　研究展望編」には 4 人の執筆者による 6 編の研究展望を掲載しています。また『年報』各号に掲載した「書評」、「コラム」、「特集テーマ」（解説）についても「5　特別編」として漏れなく掲載しました。そして荒井代表による『年報』第 1 号と第 5 号の「緒言」をそれぞれ「はじめに」と「おわりに」として掲載し、当研究会の最近 5 年間の課題と成果の総括が理解できるようにまとめています。A4 判 333 頁、2014 年 1 月 15 日発行です。

入手をご希望の方には送料実費負担にてお届けしますので事務局までお問い合わせください。事務局の残部がなくなり次第終了させて頂きます。ご希望に添えない場合はご容赦願います。

はじめに　荒井 明夫「一八八〇年代教育史研究の課題」

１．論文編

神辺 靖光「中学校史の一八八〇年代（その一）―中学校の性格の変遷―」「中学校史の一八八〇年代（その二）―教育内容と方法の形成１―」「中学校史の一八八〇年代（その三）―教育内容と方法の形成２―」「中学校史の一八八〇年代（その四）―教育内容と方法の形成３―」「中学校史の一八八〇年代（その五）―中学校教則大綱―」

田中 智子「府県連合学校構想史試論―一八八〇年代における医学教育体制の再編―」「第三高等中学校設置区域内府県委員会の実態と意義」「東華学校史再考―「半県半民」学校の射程―」「京都府における実業教育構想の形成―地域の専門教育問題に関する覚書―」

鄭 賢珠「文部省直轄学校関係者の活動―第三高等中学校教員出張記録からみえるもの―」

小宮山道夫「高等中学校と尋常中学校との接続関係に関する研究―第五高等中学校における入退学実態の分析―」

佐喜本 愛「九州学院の創設と衰退―熊本における中高等教育構想―」

２．史料紹介編

谷本 宗生「私立東京英語学校生・上田英吉の「遊学日記」（その一）」「私立東京英語学校

生・上田英吉の「遊学日記」(その二［完］)」

小宮山道夫「第五高等中学校の職務関連規程について」「千葉県会議事録（明治十九年度)」「千葉県会議事録（明治二十年度)」

福井 淳「立憲帝政党機関紙『明治日報』掲載の東京専門学校開校に対する寄書」

荒井 明夫「文部省管理山口高等中学校・鹿児島高等中学造士館 主要史料の解題」

３．研究ノート編

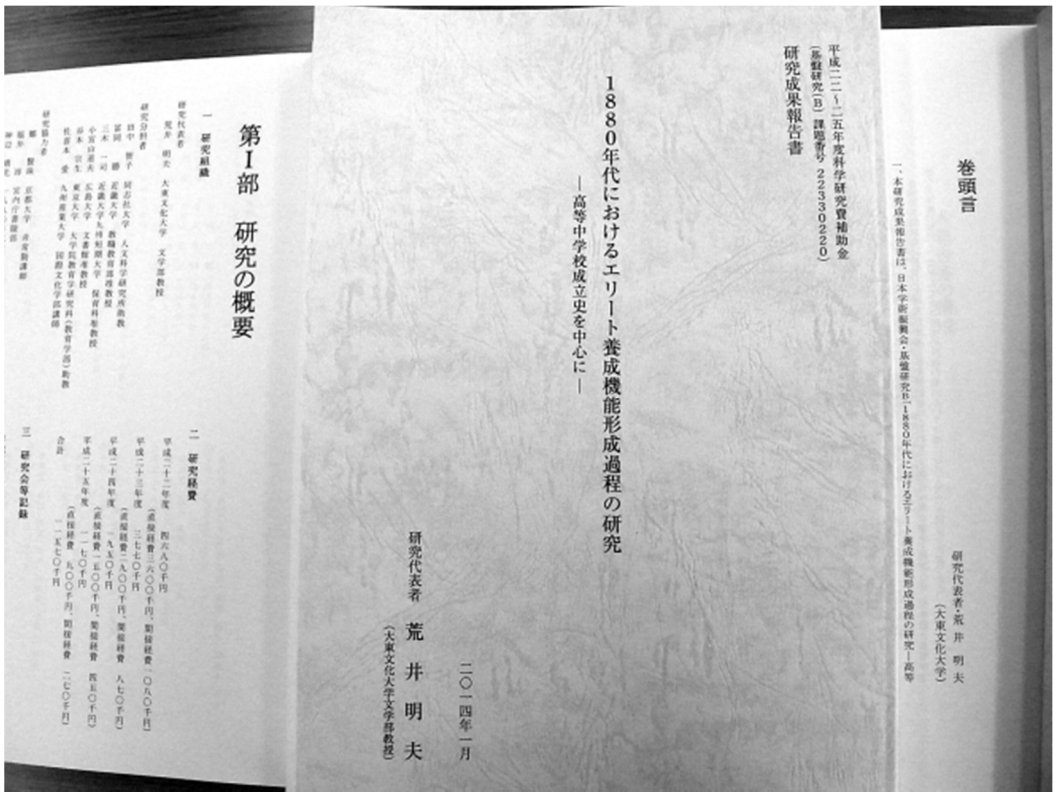
冨岡 勝「第一高等中学校寄宿舎自治制導入過程の再検討（その一）―木下広次赴任以前―」「第一高等中学校寄宿舎自治制導入過程の再検討（その二）―木下広次教頭就任の背景と就任当初の方針―」「第一高等中学校寄宿舎自治制導入過程の再検討（その三）―帝国大学寄宿舎方針の転換―」「第一高等中学校寄宿舎自治制導入過程の再検討（その四）―寄宿舎自治制案の登場・検討と自治制導入―」「第一高等中学校寄宿舎自治制導入過程の再検討（その五）―寄宿舎自治制導入過程から見えてくること―」

荒井 明夫「近代日本におけるア―ティキュレ―ション形成史序説――一八七〇年代を中心に―」「「就学督責」研究ノート（その一）――一八七〇年代から一八八〇年代への教育構造転換に関する研究試論―」

４．研究展望編

福井 淳「池内信嘉『通俗政党問答』抄―立憲改進党における選挙権と教育との関係の一事例―」

谷本 宗生「試論・第四区における高等中学校設置をめぐる地域事情について」「東京大学予備門・第一高等中学校の学校医（摂生室医員）の存在について」「一八八〇年代にお



研究成果報告書の外観

ける学生の健康・衛生環境について―帝国大学・東京大学の衛生活動―」

佐喜本 愛「第五高等中学校教員の履歴について―第五高等中学校教員の履歴について―」

三木 一司「鹿島英語学校に関する一考察―学校設置及び入学希望者と退学者の動向を中心に―」

５．特別編

田中 智子「書評　中野実『近代日本大学制度の成立』再読―刊行十年に際して―」

谷本 宗生「コラム　中野実メモの発見①」

鄭 賢珠「コラム　中野実メモの発見②」

冨岡 勝「コラム　中野実メモの発見③」

特集テーマ「一八八〇年代における高等普通教育と専門教育の再編Ⅰ」「一八八〇年代における高等普通教育と専門教育の再編Ⅱ」「一八八〇年代における高等普通教育と専門教育の再編Ⅲ」「一八八〇年代における高等普通教育と専門教育の再編Ⅳ」「一八八〇年代における高等普通教育と専門教育の再編Ⅴ」

おわりに　荒井 明夫「一八八〇年代教育史研究会のこれまでの研究成果と今後の研究課題について」

[お知らせ]

科研費研究報告書の頒布について　9 頁の記事で詳しく紹介しているように、荒井代表と小宮山会員の取りまとめによって、科学研究費の研究成果報告書が完成しました。特に、小宮山会員には膨大な分量の編集作業を担当していただきました。

ご希望の方へ、送料のみのご負担で残部のある限り送付したいと思います。ご関心をおもちの方は、事務局担当の冨岡までご連絡をお願いします。

次号(45 号)原稿締め切りについて　次号ニューズレター（第 45 号、2014 年 3 月 31 日発行予定）で終刊となります。原稿締め切りは、2014 年 3 月 15 日です。奮ってご投稿ください。

この最終号では、研究会活動記録（第 23 号以降）とニューズレター目次一覧（第 25 号以降）も掲載する予定です。

「1880 年代教育史研究会」ニューズレター　第 44 号　2014 年 1 月 15 日発行

＜研究会連絡先・原稿送付先＞冨岡　勝　「1880 年代教育史研究会」事務局
〒577-8502　東大阪市小若江 3－4－1 近畿大学教職教育部　冨岡勝研究室気付
E-mail：tomiokamasa@kindai.ac.jp
＜HP＞　http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/1880/